J.S.バッハの作品（鈴木大介編）

リュート組曲 第１番

バッハのリュート組曲は 4 つあるが、第 3 番、第 4 番は無伴奏作品からの編曲なので、リュートのために書かれたオリジナル曲は 2 つ（第何番という番号は後世に付されたものでバッハの企図ではない）。

リュートの音色を念頭に書かれた第 1 番は、古典組曲の構成で舞曲が並ぶ。サラバンドとジーグの間に挿入される任意の舞曲には、フランス発祥のテンポの速いブーレが選ばれている。

リュート組曲 第４番

本作品の原曲は、ケーテン宮廷楽長時代前半（1720 年以前）に書かれたとされる《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第3番》で、おそらく 1735～40 年頃、バッハ自身がリュート用に編曲した。全 6 曲からなり、明るめの印象を持つ舞曲が並ぶ。特に第 3 曲ガヴォット・アン・ロンドーは、耳馴染みのある有名曲。

組曲 ニ長調（無伴奏チェロ組曲 第 1 番）

無伴奏チェロ組曲（全 6 曲）が書かれた年代については、ケーテンの宮廷楽長時代（1717～23 年）前期と推定されている。各組曲は「アルマンド／クーラント／サラバンド／ジーグ」の 4 つの舞曲を定型とし、第 1 曲に「プレリュード」を、最後のジーグの前の第 5 曲に「メヌエット／ガヴォット／ブーレ」の中からいずれかの流行舞曲が置かれる。

組曲 ニ長調は、無伴奏チェロ組曲第 1 番からの編曲。第 1 曲プレリュードは、全組曲の中でもっとも有名な曲。第 2 曲は安らぎのアルマンド、第 3 曲はイタリア型の急速な 3 拍子によるクーラント、第 4 曲は優雅なサラバンド、第 5 曲には 2 つのメヌエットが置かれている。第 6 曲は軽快な短いジーグ。

組曲 イ短調（無伴奏チェロ組曲 第 2 番）

無伴奏チェロ組曲第 2 番からの編曲。第 1 曲プレリュードは、和声よりも旋律に重点が置かれている。第 2 曲は高度な技巧を要するアルマンド、第 3 曲のシンプルなイタリア型クーラントを経て、第 4 曲は引き伸ばされた旋律に和音が重なる典雅なサラバンド。第 5 曲に用いられた 2 つのメヌエットには、どこかしら古風な響きが感じられる。第 6 曲のフランス風ジーグは、規則正しい 8 小節の楽節構成。

組曲 ト長調（無伴奏チェロ組曲 第 3 番）

無伴奏チェロ組曲第 3 番からの編曲。第 1 曲プレリュードは淀みなく流れる 16 分音符が大きなスケールを感じさせる。第 2 曲は軽やかな愛らしさを持ったアルマンド。第 3 曲は音階的な分散和音とスラーで奏されるイタリア型クーラント。第 4 曲は典型的なサラバンドのリズムに旋律が勝っていく瞬間が美しい。第 5 曲ブーレは単独で奏される機会も多い佳品。第 6 曲は掉尾を飾るにふさわしい堂々としたジーグ。